

## 学位論文題名

竹富島における生活の持続のためのソーシャル・  
イノベーションに関する研究

## 学位論文内容の要旨

近年、グローバリゼーションが進むツーリズムが、訪問者（ゲスト）にとって魅力的で満足度の高い体験となるか、またその受け入れ地域（ホスト）がその特性を失うことなく継承的発展ができるか、それらの質をめぐる動態的な関係をいかに戦略的に構築するかが問われている。他方、現代の地域計画やまちづくり領域においても、自然環境や歴史的文化といった特性を継承し、かつ自律的に生活を創造するにあたって、ツーリズム・インパクトに伴うプラスマイナスの影響をいかに受け入れるか、その政策的対応が問われている。本論文は、以上の問題意識をもって、観光学総論を背景に、とくに地域づくりにおける実践的方法論を追求考察した。研究の方法としては、沖縄県の一離島・竹富島の地域社会を主たる研究対象として取り上げ、そこにおける生活の持続のためにはツーリズム・インパクトを同化し、発展しうる社会的なしくみの構築が必要であることを示し、その構築プロセスにおいて引き起こされる変革を「ソーシャル・イノベーション」と呼んで、その実現のための条件を明らかにした。

本論文の構成は、以下の通りである。まず序章では、上述した研究の背景となる問題意識について整理を行い、「地域における生活の持続のためには、ツーリズム・インパクトを同化し、発展しうる社会的なしくみの構築が必要であること」と仮定し、そのために必要な変革としての「ソーシャル・イノベーションの実現のための条件を明らかにすること」という本論文の目的を設定した。さらに、第1章以降の議論を展開する上で必要な基本的用語、および関連分野における先行研究や社会的な動向の整理から本論文の独自性を提示し、本論文の構成を示した。とくに、既存のツーリズム論としては、ツーリズムによる訪問者＝ゲストであるとする、これを招致して迎える地域は主人＝ホストであって、単なるサービスの提供者にとどまるものでなく、観光の基本は相互の地域文化の相互対等な交流の場であるという文化人類学から導かれた論（Smith, V. L.）に着目した。また、植民地的、あるいはグローバルな資本が、地域の特性を消耗させる画一的なツアーやリゾートを拡大する趨勢への対応論としてのツーリズム・インパクト同化論（Rossides, N. J.）にも着目した。

第1章では、グローバリゼーションが進む現代においては、課題を抱える地域にとって、外部環境からのインパクトをいかに内部化して主体的な地域運営をすすめるか、自己の特性を知り外部に向けて演出し発信するか、公共および民間セクターがいかに連携して地域を運営するかが重要であることを既往理論と事例分析により示した。そこでイノベーション＝新結合（シュムペーター）、新たな経営＝マネジメント論（ドラッカー）の理論を、新たな社会的なしくみへの発展の評価モデルとして、地域の社会的なしくみの解釈のために援用することを提示した。また、とくに社会的なしくみが発展するための変革＝ソーシャル・イノベーションについて、先行研究や既往の事例を整理することで、社会的なしくみが発展する過程を分析するために必要な視点として、地域総体、内発的・外発的な力の性質と相互関係、イノベーション実現の目的、およびきっかけであることを示した。

第2章では、沖縄県・竹富島を事例地として、第1章で示した社会的なしくみが発展する過程の分

析に必要な視点のひとつである、地域総体を構造的に明らかにすることを試みた。そのため、当該地域における生活の持続の歴史を物語る時代区分を、土地利用および水源の所在、遺跡と歴史的な建造物、定住施設の存在、伝統的な景観、信仰、慣習、地域運営の記録、法制度などから四つの区分：Ⅰ期集落発生期、Ⅱ期琉球王府統治期、Ⅲ期伝統の成熟期、Ⅳ期価値の顕在化期が適切と判断した。次に各時代区分における当該地域の特性を伝える遺産要素を拾い出し、生活の持続に関する物語を表徴する相対的な遺産マトリクスを作成することで、文化遺産を一覧化した。さらに、これら遺産の管理状態、継承主体を調査分析したことにより、遺産要素の発生と活用、そして衰退あるいは継承といった住民の生活との関係の動態性を明確化した。

第3章では、主な事例地である沖縄県・竹富島における社会的なしくみを理解するため、その体系化を試みた。第2章で明らかにした当該地域の総体を構成する要素である文化遺産が、いかに地域住民の生活において創造や継承されてきたかを分析した。とくに当該地域の公共および民間セクターの観点から、「仕事」と「役割」とに着目した。第2章で用いた時代区分ごとに、当該地域の社会＝共同体がいかに運営されてきたかについて分析した。結果、当該地域の社会的なしくみは、経済体系、統治体系、共同性という3つの要素で説明できた。またそれらの関係として、社会構造としては経済体系と統治体系とで構成され、共同性という特徴を備えていることを示した。

第4章では、地域における生活を持続させてきた構造を明らかにするため、イノベーションの評価モデルを援用することで、沖縄県・竹富島における社会的なしくみの変革としてのソーシャル・イノベーションの構造と課題とを示した。第2章で用いた時代区分を用いて、社会的なしくみに変化について、内発的、外発的な要因との関係、地域総体と関係主体との関係に着目することで分析を行った。さらに、当該地域におけるツーリズムがいかに展開してきたかについて、外発的、内発的な要因の分析を行い、また第3章で示した社会的なしくみを構成する要素がツーリズム・インパクトによりいかなる影響を受けたかについて分析することで、ツーリズム・インパクトをいかに同化できるかを示した。結果として、当該地域では6つの氏族を源流として、地縁、血縁による人間関係を基本として、主に外部環境の変化に対応した社会的なしくみの変革＝ソーシャル・イノベーションを経ながら現在の当該地域が形成されたことを示した。その間には、琉球王府や近代日本による統治により、統治体系について、とくに外部地域からの強制的な変革がもたらされた。また近年は、過疎化を背景とした地域内外の人々の交流から、とくに経済体系の変革が実現された。ツーリズムとの関係については、この近年の経済体系の変革において、地域住民が外部の有識者や支援者と交流をしながら、主体的に起業を行うことで、計画的というよりは経験的な判断により文化遺産との関係を構築してきたことが、インパクトの内部化を実現した要因であることを示した。また、伝統的な共同体としてもつ共同作業や祭事行事や慣習といった社会的なしくみが、効果的な役割を果たしていることも示した。他方、統治体系においては、NPOによる文化遺産と内外の人々をつなげようとする活動はあるものの、多くの課題を抱えていることを示した。

以上から結章において、当該地域において生活を持続させるためのソーシャル・イノベーションの実現に必要な条件として、①主体)生活の持続を前提とする社会的なしくみの体現者、②資産)文化遺産の継承と活用、③新たな考え方や技術の獲得)外発的なインパクトの同化の3つを提示した。さらに、地域社会のためにツーリズム・インパクトをいかに同化するかについて、社会的なしくみの構成要素ごとに提示し、また具体的方策について考察を行い、本論文の結論とした。

# 学位論文審査の要旨

主査	特任教授	石森秀三
副査	特任教授	臼井冬彦
副査	教授	敷田麻実
副査	教授	西山徳明

## 学位論文題名

### 竹富島における生活の持続のためのソーシャル・ イノベーションに関する研究

本学位論文は、沖縄県竹富島を事例として、現地におけるまちづくりへの実践参加と長期にわたる参与観察にもとづいて、ツーリズム・インパクトを生活持続のために内部化することによって地域発展を導きだすことのできる「社会的なしくみの変革＝ソーシャル・イノベーション」を引き起こす諸条件を明らかにしたものである。

近年、ITC技術が進化するなかで、実際に地域を訪れる観光のあり方が、訪問者（ゲスト）にとって魅力的で満足度の高い体験となりうるか、またその受け入れ地域住民（ホスト）が地域の特性を失うことなく継承し発展できるか、そして「観光の質」をめぐる動的な関係をいかに戦略的に構築できるか、などが重要な地域課題として問われている。他方、現代の地域計画やまちづくりの分野においても、自然環境や歴史文化といった地域特性を継承し、かつ自律的に生活を創造するうえで、ツーリズム・インパクトがもたらす正（プラス）と負（マイナス）の影響を地域がいかに受容するかについて、その政策的対応が問われている。

以上の研究背景のもとで、本論文では、序章で研究の目的や方法などが示され、第1章でイノベーション＝新結合（シュムペーター）および新たな経営＝マネジメント論（ドラッカー）の理論を、新たな「社会的なしくみ」への発展の評価モデルとして提示し、第2章では、事例分析として「社会的なしくみ」の発展過程分析に必要な「地域総体」を構造的に解明している。生活持続の歴史を四区分（集落発生期、琉球王府統治期、伝統の成熟期、価値の顕在化期）に分け、区分ごとに地域の特性を伝える遺産要素を抽出して、生活の持続に関する物語を表徴する遺産マトリクスを作成することで文化遺産を構造的に説明し、それら遺産の動態的管理状況を明らかにしている。第3章では、竹富島の「社会的なしくみ」を体系化し、文化遺産とそのしくみとの関係を「仕事」と「役割」に着目して分析することによって、「社会的なしくみ」を経済体系、統治体系、共同性の3つの要素で説明している。第4章では、地域における生活の持続構造を明らかにするために、「社会的なしくみ」の変革としてのソーシャル・イノベーションの構造と課題を示す一方で、3要素（経済体系、統治体系、共同性）がツーリズム・インパクトから受けた影響の分析をとおして、地域におけるツー

リズム・インパクトの「同化」の過程を解明している。結章では、生活を持続させるためのソーシャル・イノベーションの実現に必要な諸条件として、①生活の持続を前提とする社会的なしくみの体現者としての「主体」、②文化遺産の継承と活用の結果としての「資産」、③外発的なインパクトの同化による「新たな考え方や技術の獲得」、という3条件を提示して結論としている。

以上のように、本論文は、地域にインパクトを引き起こすツーリズムの特性に着目し、そのインパクトを内部化して発展を導き出す地域のソーシャル・イノベーションについて、詳細な実態調査にもとづいて、それが引き起こされる諸条件を明らかにしており、今後の各地域における自律的発展の可能性を提示している点において、学術的に高く評価できるものである。

とくに本研究の独自性は、事例地域において過去のいかなる過程で「社会的なしくみ」の変革が生じたかについて解読するために、イノベーション理論を新たな「社会的なしくみ」への発展評価モデルとして援用している点、またその解読の際に「文化遺産」について従来の学術的あるいは文化財的な価値付けだけではなく、「地域の資産」として捉えることで、それらがソーシャル・イノベーション実現後の新たな体系においても構成要素となりうることを提示した点にある。

さらに、ソーシャル・イノベーションの実現において、地域課題の解決が重要な過程であることを説明し、その現代的な方策としてツーリズム・インパクトの「同化」があり、具体的には文化遺産と地域内外の人々との新たな関係構築が重要な要因であることを提示している。具体的には、歴史的に外部環境からのインパクトを断続的に受け、それによって生じる諸問題を地域課題へと昇華し、その解決への取り組みをとおして「社会的なしくみ」を発展させてきた竹富島における地域社会の発展モデルとして示している。このことは、現代において、ツーリズムが新たな地域課題の解決に効果を発揮する可能性を示唆しており、観光創造学の発展に貢献する学術的な成果であると高く評価することができる。

なお、2月15日に開催された公開の口頭試問では、審査委員より、ソーシャル・イノベーション概念に対する社会一般の理解における本研究の位置づけや、シュムペーター理論における「破壊」と「創造」プロセスの理解、インパクト論として本論が援用したニコス・R・ロシデスのRAC=Regional Assimilative Capacity（地域同化容力）理論の理解等を問い直すものがあつたが、いずれの質問にも説得力のある回答がなされた。

いずれにしても、地域社会を取り巻く環境が大きく変化するなかで、ソーシャル・イノベーションの実証的研究をとおして、文化遺産と地域内外の人々との関係構築をとおしたツーリズム・インパクトの内部化の実現が、地域における生活の持続につながる地域課題の解決において重要な役割を果たし得ることを論証した点は、従来の観光まちづくり研究を大きく発展させ、新たな観光研究分野を確立しうるものであり、博士（観光学）の学位論文として学術的に高く評価できるものである。よって、著者は、北海道大学博士（観光学）の学位を授与される資格があるものと認める。